

私の花織

日本工芸会 正会員 楠 光代

1. はじめに

私は「花織」の美しさに魅せられ、長きにわたり花織を織り続け、現在は日本工芸会に籍をおきながら活動しています。ここに至るまでの経緯と花織についてお話させていただきたいと思います。

1988年から1991年、私は夫の仕事の関係でインドの首都ニューデリーに住んでいたことがあります。そこで過ごした3年の間に今まで経験したことのない環境や文化に触れることとなりました。

ニューデリーには地方から様々なものが集まり、数多くの工芸品や民芸品を見る機会がありました。市が開かれると織物、染物、陶器、真鍮製の品々などを売る多くの露店が集まり、日本では目にする事のない光景や民族衣装を纏った人たちの活気に大いに刺激を受けました。

また市内にはクラフトミュージアムがあり、そこで行われていたインドの民族衣装サリーの生地を織る実演コーナーを見るのを楽しみに何度も足を運びました。大きな機^{はた}にかけられた経糸に金糸を使って動物や植物などの緻密な模様を織り込んでいく作業に驚きと感動を覚えながら見入っていたものです。

そして何度か話をするうちに、その人たちが小さな機^{はた}を使って私に織りを教えてくれたのです。それは単純な平織りでしたが、そこで織りの楽しさを知り、その後また別のインドの人からも織りを習う機会があり、更に織りへの興味が深まっていきました。帰国してから機を買って織りを習い始め、以来30年余りの私の織り人生が始まることになりました。

その中で私は染織技術や織りの楽しさを教えてくれた二人の先生と出会いました。一人目の先生には、平織りから複雑な組織織りなどの基本的な織りを教えて頂きました。その頃はまだ帯や着物には興味がなく、ウールや綿の糸でマフラーやショール、服地、タペストリーなどを織っていましたが、その後読谷山花織^{よみたんざんはなおり}を知り興味を持ち始めました。読谷山花織は主に緋と花織を組み合わせるのですが、私はそれまで緋の基本を習ったことがなかったため、緋

の技術を学べる教室を探して二人目の先生と出会いました。そこでは緋、糸の染色、帯や着尺を織るための基本を教えて頂きました。その後、先生の元を離れて自分が一番やりたかった花織に専念することにしました。

2. 花織について

花織は沖縄の代表的な織物の一つで、その歴史は遙か琉球王国の時代まで遡ります。沖縄の染織について記された資料がほとんど残されていないため、その正確な詳細は分かっていないようですが、琉球は古くから東南アジアや中国等と交流があり、その中で影響を受けながら育まれてきたものと推測されます。私は花織の研究者ではありませんので、その歴史について多くを語ることは憚られますが、沖縄の染織文化は島津藩の侵攻、琉球王国の解体、廃藩置県、第二次世界大戦などの時代の波に翻弄され続け、一旦衰退してしまった花織は後に多くの方々の尽力により復元されていったのです。

沖縄の花織には読谷山花織、首里花織、南風原花織、与那国花織、知花花織などがありますが、それぞれ織られている地域によって技法や特色に違いがあり、緯浮花織^{よこうきはなおり}、経浮花織^{たてうきはなおり}、両面浮花織、手花織などがあります。その中で特に私が心引かれたのは読谷山花織でした。通常平織は経糸が綜統^{そうどう}によって交互に上下し、そこに緯糸^{おと}を通して箆で打ち込んでいくというのですが、読谷山花織は花綜統^{はなそうどう}を使って平織の間に模様に合わせて緯糸とは別の色糸を織り込んでいく技法で織られます。表側に出るのは小さな四角い点で、その点が集まって幾何学模様を構成しています。そしてその裏側は表に出ない部分の糸がびっしりと渡った状態になっており、これが読谷山花織の特徴でもあります。

私が織っている花織は技法としてはこの緯浮の読谷山花織に「近い花織」です。

ここで敢えて「近い花織」とするには理由があります。歴史の流れによって衰退し、姿を消していた読谷山花織を戦後の経済振興のために復元しようという動きが起り、その依頼を受けて読谷山花織の

復活に尽力したのが、後に人間国宝に認定された與那嶺貞さんと読谷村の婦人会の方々でした。その努力によって復元された読谷山花織は現在も読谷山花織事業協同組合により受け継がれています。読谷村に在住されている方々を中心に読谷山花織の技術の伝承と後継者の育成を目的として活動されており、そこで織られたもののみが読谷山花織と認定されるのです。そのようなことから、私のように他県で暮らし、読谷村で花織を学んだこともなく自身の自由な発想で織っている花織は、読谷山花織に「近い花織」という表現になり、敢えてその名称は避けて私流の花織を織っているのです。

3. 花織との出会い

私が花織を織り始めるきっかけとなったのは今から15～6年前、書店の工芸コーナーで偶然見かけたある一冊の本との出会いでした。

鳥巢水子さんの『私の花織・花紹織』というタイトルの本が目にとまり、手に取って開いた時の衝撃は今でもはっきりと覚えています。様々な色の経糸に織り込まれた鳥巢水子さんの花織は、その色彩や模様によって表情を変えて無限の広がりを感じさせます。野に咲く可憐な花々、夜空にまたたく星、空から舞い降りる雪、そして静寂の中で光り輝く聖堂のステンドグラス等々。一瞬のうちにその世界に引き込まれ、心が踊り、それらの作品の美しさにすっかり魅了されてしまいました。

その本を手には家に帰ってから毎日ながめていましたが、そうしているうちに「何とか自分もこのような花織が織れないものだろうか」と思うようになりました。しかし、その術も分からず教えてくれるところも見つかりませんでした。それでも諦めきれずにいました。

旅行で沖縄を訪ねた折、何か花織に関する糸口があるのではないかと思い、読谷伝統工芸総合センターに足を運びました。花織を織るのに必要な花綜統がどのように機に取り付けられているのかを見てみたかったのです。残念ながらそこでは実際に花織を織っているところや機などを見ることはできませんでしたが、別の場所で観光客向けの花織の体験コーナーがあることを知り、そこで花綜統の仕掛けを見ることができました。その仕掛けは機の上部から花綜統を吊るし、そこから下げたロープで足を使って模様部分の経糸を引き下ろし、開口した部分

に糸糸を通して模様を織り込むという至ってシンプルなものでした。それは織りの経験がない人でも織れるように2つの花織を織るだけの簡単なものでしたが、その仕掛けを見たことが私にとって大きなヒントになったのです。

その後、本などを調べたりしながら自分が使っている機にどのようにして花綜統を付けければいいのかを考えました。細い角材や棒、たこ糸、ゴムひも、手芸用カラーロープなど思いつく材料を用意し、何とかそれらしき仕掛けを作って機に付けてみたところ簡単な花織を織ることができました。

始めは極シンプルなもの、次はもう少し模様を増やし、何度か仕掛けを見直しながら試行錯誤を重ね、少しずつ模様を増やしていくことを繰り返していきました。このやり方が正しいのかどうかはわかりませんが誰かに聞くこともできず、自分が使っている機で花織を織るにはこれ以外思いつかなかったのです。そのようにして徐々に複雑な模様が織れるようになっていき、今でもこのやり方で織り続けています。

鳥巢水子さんもまた花織の美しさに魅せられたお一人で、ご自身の豊かな感性と技巧により独自の世界を作り上げられました。その美しく独創的な数々の作品に魅せられ感銘を受けて、今私は花織を織っています。

もしあの時、偶然あの本と出会うことがなかったら私は花織を織っていなかったのではないかと思うと今でも不思議な巡り合わせを感じるのです。

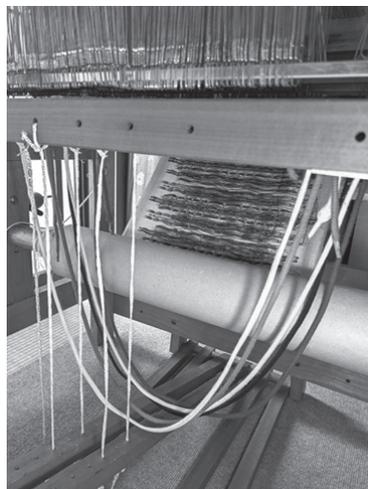


写真1 経糸を足で引き下ろすために吊り下げたロープ。綜統ごとに色を変える。

4. 私の花織

花織の制作工程には ①図案作成 ②糸の準備 ③緋糸の括り ④糸の染色と糊付け ⑤整経 ⑥仮箆通し ⑦経糸巻き ⑧花織用糸綜統作成 ⑨綜統通し ⑩箆通しなどたくさんの工程があり、これらを経て経糸を機に結び付けてやっと織り始めることができます。

【図案】

読谷山花織はジンバナ（銭花）、オージバナ（扇花）、カジマヤーバナ（風車花）の3つの模様を基本とし、緋や縞や格子と組み合わせるデザイン構成となっていますが、私の場合は特に決まったパターンはなく、思いつくまま自由にデザインを考えています。

私が織りの制作工程の中で最も時間を掛けているのは図案の作成です。図案は机を前にして浮かんでくるわけではありません。日々の暮らしの中で何気なく目にしたもの、散歩中に見掛けた花、景色の中の季節の色、建物の窓や天井の格子、カーテン越しに見える庭の木々の影、雑誌で見た写真等々挙げればきりがなほほどヒントに溢れているのです。とはいえ、これだと思えるものが頭の中に降りてくるのには時間がかかり、またこれを具体的な形にするのにいつも長い時間悩み続けることとなります。

図案を描くときには方眼紙を使います。花織は小さい四角い点で構成されていますので、図案を描くのに方眼紙が適しているからです。まずは方眼紙の上に線に関係なく自分のイメージしたおおまかな図案を描いていきます。それからその中を四角い点で埋めていくような感じで少しずつ考えながら図案を決めていきます。しかし花織はどんなデザインでも自由に織れるわけではありません。そこには花織ならではの縦横の制約があるからです。経糸は平織を織るための綜統を通り、更に模様を織るための花綜統を通ります。花綜統の数は模様が複雑になればその数も増えていきます。

例えば一枚の花綜統を足で引き下ろしたときにはそこを通るすべての経糸が下がりますが、図案の上で本来下がってほしくない部分まで下がってしまったり、逆に下がってほしい部分が下がらなかったりということが起こってくる場合があります。複雑な模様になれば花綜統が5枚6枚と増えていき、更に同じような問題が重なって起こってくるわけで

す。しかしそこでそのデザインをやめるのではなく、どうすれば織れるのかを考え、同じ経糸を複数の花綜統に通したり、その組み合わせを考えたりすることで縦横の関係が成立するように工夫しながら図案を作っています。

【染色】

沖縄の花織は琉球藍、車輪梅、福木などの植物染料で染めた糸で織られています。私は化学染料を使って糸を染めています。私は工房という作業スペースを持っておらず、ごく一般的な戸建ての家で作業をしています。家の中で大きなタンクを使って植物を煮出したり、一度に大量の糸を染めたりすることができないという物理的な理由もありますが、年間に数少ない作品を作る私にとっては、必要な分の糸を必要な時に染めるという点で化学染料による染色が適しているからです。

帯や着尺を織る場合、糸は単色ではなく縞、緋、格子、グラデーションを入れるなど複数の色を使います。作品を作るときは、その都度色ごとに糸の量を計算しその分の糸を染めていくので、その点で化学染料が使いやすいのです。そして化学染料は染色しやすいだけではなく、絵を描く時に使われる水彩絵の具のように自分で色を調合して思うように色を作ることができるからです。花織の場合、経緯の地糸はもちろんですが、浮き織に使う色糸を染める必要があります。デザインによっては10色以上の色を染めることもあります。花織は複数の色糸を使って幾何学模様を織り込むことでより華やかにキラキラと輝いた表情を見せてくれるのです。

【織る】

私は通常名古屋帯を織っています。名古屋帯の出来上がり寸法は約3.6mほどですが、帯地を織る場合は仕立ての際に必要な返しや試し織り、サンプル等を含めて6.5~7mの経糸を整経します。糸の本数は使う糸の太さや織り幅によって違いますが、私の場合は約800本の経糸で織っています。図案に緋も入れますが花織がメインなので緋の量はさほど多くはありません。緋の糸は別に分けて整経し、緋部分に印をつけて括って染色した糸を図案に合わせて配置しながら全ての経糸を整経していきます。

経糸を機にセットし、図案通りに綜統、花綜統の順に通し、箆を通して機に結び付けてようやく織り始めることができるようになり、花綜統から下げたカラーロープを足で引き下ろしながら色糸を織り込

んでいきます。

5. 雪あかり

今年の5月に開催された第58回日本伝統工芸染織展において、花織帯「雪あかり」で日本経済新聞社賞を受賞しました。2015年の第55回東日本伝統工芸展奨励賞、2018年の第65回日本伝統工芸展NHK会長賞、2023年の第1回飛鳥クルーズ賞（日本工芸会会員賞）の受賞に続き、4度目の受賞作となります。

この作品にはいつもと少し違う思い入れがあります。毎年日本工芸会の染織関係では、春の東日本伝統工芸展、日本伝統工芸染織展、秋の日本伝統工芸展の3回の展覧会が開催されており、なるべくこの3回には応募するようにしています。もちろんこれらは全て公募展ですので、工芸会の会員だけでなく一般の方も応募することができます。経験豊富な工芸会委員や学識者の先生方による厳正な鑑審査が行われます。ですから応募する側はいつも戦々恐々の思いで出品しなくてはなりません。

私が出品の際に心掛けているのは、毎回作品のデザインや色が同じような傾向にならないようにすることです。花織は幾何学模様が縦横に並ぶので、たとえそれが違うデザインであっても色が似ていると同じような印象になってしまうからです。

この「雪あかり」を制作する前に東日本伝統工芸展に向けて別の作品作りに取り組んでいたのですが、このとき今までにないデザインが思い浮かび、わくわくしながらじっくりと時間をかけて図案を作成しました。ところがいざ織り始めてみるとうまく進めることができなかったのです。

氣負ってデザインに凝り過ぎてしまったため織る

のが非常に難しく、ミスの連続で織り進めることができませんでした。結局デザインを大きく見直さなくてはならなくなってしまい、思い通りの作品にならなかったのです。

このことを猛省し一度原点に帰ろうと思い、花織を始めた頃のことや自分が織りたかったものを思い返しました。そして制作したのがこの「雪あかり」という作品でした。これまで様々な色の帯を織ってきましたが、この帯は今までに織ったことのないシックなグレー系のモノトーンでまとめ、色数を抑えて全体的に静かなイメージの作品に仕上げました。今回は最初から色を決め、そこからこの色のイメージに合うデザインを考えていき、そして浮かんだのがこの作品でした。

降り積もった雪は、昼間は太陽の光の中で真っ白くキラキラ輝いていますが、日が落ちて辺りが暗くなると街灯や家々の灯りを反射してほんわり浮き上がって見えるような光景をイメージしてデザインを考えました。

地の部分はグレー系で経緯の糸をそれぞれ濃淡5段階に染めてグラデーションをつけ、6枚の花綜統で白、青、黄など7色の色糸を織り込み、全体が引き締まった印象になるように経緯緋で真っ白いポイントを入れてデザインをまとめました。

今までにない色調にチャレンジし、それを高く評価して頂き今回の受賞に繋がったことは大変嬉しく、またこれから作品を作る上で大きな励みとなりました。花織を始めたとき自分は何を織りたかったのか。それは決して奇をてらうものではなく自分が綺麗だと感じるものを織り、それを見た人にも綺麗だと感じてもらえるものを織るというシンプルなものでした。「雪あかり」はそんな思いに立ち返らせ

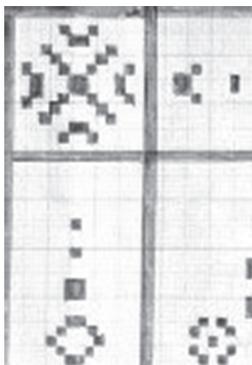


写真2 図案

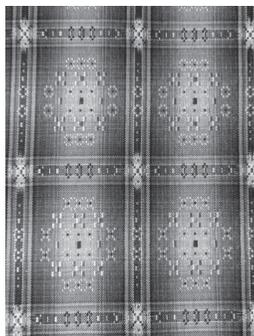


写真3 作品（表アップ）

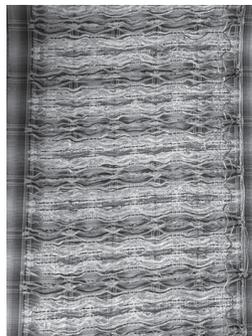


写真4 作品（裏）

てくれた作品です。

6. 花織への思い

私の花織は一冊の本との出会いから始まりましたが、本当にこのやり方でいいのかを自問自答しながら手探り状態で続けてきました。自分自身の自由な発想ができる反面、誰かにアドバイスを求めることもできず、成功しては喜び、失敗しては落ち込むことの繰り返しです。それでも続けているのは花織が好きだからに他なりません。

つい最近のことですが、日本工芸会の事務所にて古い図録を頂く機会がありました。昭和61年(1986年)、平成7年(1995年)、平成13年(2001年)、平成15年(2003年)の4冊で、何れも私が日本工芸会に入会するずっと以前のものです。図録にはすでにご逝去されている方、退会された方、後に人間国宝になられた方、また今現在も活躍されている方々のお名前がありました。

それらの図録の中に、私が花織を始めるきっかけとなった鳥巢水子さん(2004年ご逝去)の作品がありました。今までに私が実際に見た鳥巢さんの作品はたった一つだけで、それ以外は本で目にするだけでしたが、その作品を日本伝統工芸展の図録の中でも見ることができ、生前鳥巢さんが日本工芸会で活躍されていたことをうかがい知ることができました。

実は他にももう一つ大きな発見がありました。図録の中に「読谷山花織着尺」を出品されている方が4人もいらしたのです。そしてその中のお一人が後に人間国宝になられた與那嶺貞さんだったことに大変驚きました。また鳥巢水子さんの他にも花織や花紹織を出品されている方が何人もいらしたことがわかりました。巧みな技術によるそれらの作品のデザインは、今見ても色褪せることなく新鮮で心引かれるものばかりです。残念ながら今では日本伝統工芸展の花織の出品者は減ってしまいましたが、このたった4冊の図録を見る限りでも当時織られていた方々の花織への思いが感じられ、これからも花織を続けていこうという気持ちを新たにさせてくれるものでした。

私が日本工芸会に入会したのは2014年です。当時58才というかなり遅いスタートでしたが、以来10年間花織にこだわって織り続けてきました。

今更ですが何かに感動し夢中になってそれを追い



写真5 花織帯「雪あかり」

続けることは、たとえそれがどんなことであっても遅くはないということをこの年になって思うのです。

また花織がきっかけとなって、染織に限らずいろいろな分野の多くの方たちと出会うことができました。それぞれの作品の素晴らしさはもちろんですが、作品へのこだわりやひたむきに制作に取り組んでおられることに刺激と感銘を受けて、私自身の織りの世界も少しずつ明るく開けていくように感じています。

私にこのような人生を与えてくれた一冊の本との出会いに心から感謝しています。そしてこれからも末長く花織が織り継がれていくことを願っています。

《参考資料》

鳥巢水子 著『私の花織・花紹織』(求龍堂)
與那嶺一子 著『沖縄 染織王国へ』(新潮社)